

純白のマスクを楯として会へり 野見山ひふみ

二十四節気の一つ冬至も過ぎ、日が徐々に伸び始めましたが、寒さはこれからが本番を迎えます。ところで冬には欠かせないマスクは、俳句の季語にもなっています。風邪やインフルエンザの感染予防や、寒さと乾燥から喉、鼻を守るために用いられ、防塵用のマスクもあります。新型コロナウイルスによるパンデミック以降、マスクは新型コロナウイルスから自分の身を守るとともに、相手を守るために着用する道具になってしまいました。飛沫感染を防ぐにはマスクが最も効果的であるという報告もなされており、当分は肌身離さず携帯しなければならないようです。一刻も早くコロナ禍が収束し、マスクを楯としなくても済む日常が来ることを願うばかりです。



校内球技大会が行われました

12月11日、「若駒杯」校内球技大会が行われました。バレーボール、ソフトボール、サッカーの三つの競技と、フィナーレを飾る男女混合リレーにおいて、クラスの名誉をかけた熱い戦いが展開されました。生徒諸君の元気溢れるプレーや、若者らしい澁刺とした姿は、大地を駆ける若駒を連想させるものがありました。スポーツの楽しさを味わい、クラスの団結を図る所期の目的は達成され、球技大会は成功裏に幕を閉じました。

おすすめ書籍



君塚直隆著『悪党たちの大英帝国』（新潮社）
本書は「辺境の島国イギリスを、世界帝国へと押し上げた」七人の悪党の実像を描く一冊です。その七人とはヘンリ8世、クロムウェル、ウィリアム3世、ジョージ3世、パーマストン、ロイド・ジョージ、チャーチル。全員が世界史の教科書に名前が出てくる歴史上の人物です。著者は長年にわたって蓄積された研究の成果を踏まえ、客観的な視点から一人ひとりの功績や実像を、功罪も含めて生き生きと描いています。その描写には、ビジネス書にありがちな、偉人の生涯から都合のよい教訓を導く姿勢は微塵もありません。読後に「人間が歴史を動かす」という言葉が説得力をもって迫ってくる、歴史好きには必読の本と言えるでしょう。

2学期終業式が行われました

12月18日、2学期の終業式が放送により行われました。私からは、コロナ禍第三波の只中にあることから、気を緩めず、基本的な感染予防策を講じるよう伝えました。また、最近読んだ本として、「本当の頭のよさってなんだろう」（斎藤孝著）を紹介し、学校生活を通じて知（判断力）、仁（思いやりの心）、勇（行動力）を培うことの大切さを話しました。激動の令和2年が終わろうとしています。令和3年が生徒諸君にとって、素晴らしい一年になることを祈念しています。

ラグビー関東五大学対抗戦で活躍した卒業生～明治大学の佐々竹直義～

先日、関東大学ラグビー対抗戦Aグループの優勝をかけ、伝統の早明戦が行われました。秩父宮ラグビー場は熱気に包まれ、1敗の明治が全勝の早稲田を降し、逆転優勝を果たしました。

ところで大学ラグビーの歴史は古く、明治32（1899）年に慶應義塾大学にラグビー部がつくられたのが日本初とされています。その後、次々に各大学でラグビー部が誕生しましたが、昭和3（1928）年、慶応・明治・早稲田・立教・東京帝大により、関東五大学対抗戦がスタートします。以来、関東の大学ラグビーは紆余曲折を経て現在に至っていますが、学生スポーツの花形の一つになっています。対抗戦グループにおいて、常にライバル関係にある早稲田と明治ですが、明治が初優勝したのは、遡ること89年前の昭和6（1931）年のこと。当時の主力メンバーに相馬中学を卒業した佐々竹直義（相中第25回卒）がいました。

佐々竹は、明治41年10月に中村町内で商いを営む佐々竹久太郎の長男として生まれました。中村尋常小学校を卒業後、大正10年4月に相馬中学に入学、昭和2年3月に卒業しました。「校友会雑誌」によれば、在学中の佐々竹は野球部に所属し活動していますが、大正14年に福島中学戦に7番ライトで出場したほかは、目立った活躍はなかったようです。2年先輩には後に早稲田大学野球部の主将を務めた黒木正巳がいました。

明治大学に進学後、なぜ佐々竹がラグビー部に入部したのか。その経緯は詳らかではありませんが、4年間、FW（フォワード）としてプレーしました。資料によれば、佐々竹の体格は身長五尺五寸（約160cm）、体重二十二貫（約83kg）。特に体重は他の選手に比べて抜きん出ており、恵まれた体重を活かし、FWのプロップとして重要な役割を果たしました。スクラムでは最前列で組み合

い、ラインアウトではジャンパーを持ち上げ、モールでは相手を押し込むなど、まさに力と忍耐でチームを支えました。なお、「相馬市史」第2巻や「馬城会相馬支部報」創刊号では、佐々竹が主将を務めたという記述がありますが、それは誤りのようです。「明治大学体育会ラグビー部 部史1923-1988」によれば、佐々竹が四年生の時（昭和7年）に主将を務めたのは都志梯二でした。しかし、佐々竹がチームの主力であったことは間違いありません。試合記録を見るとFWの欄に必ず佐々竹の名前が確認できます。卒業後の昭和8年の記録には、「昨年のメンバーから都志、佐々竹（FW）、木下（ハーフ）、安田（バックス）らが学窓を去り、4人のベテランを失った。」とあり、また、早稲田に連覇を許し優勝を逃した原因は、重量FWの小型化により伝統の押しのラグビーが影を潜めたことにあるとの記述からも分かります。

大学卒業後の佐々竹は、仙台鉄道局に就職し、経理課を経て資材部購買課に配属され、課長として腕を振りました。その後、東北日新商事専務取締役、京阪商事代表を務めました。その間、馬城会仙台支部長を務め、昭和53年の創立80周年記念事業、昭和59年の馬城会館建設事業に寄付金を寄せるなど、母校や同窓会の発展に尽くし、昭和60年1月に逝去しました。その生涯において、学生時代にラグビーで鍛えた身体と忍耐力は、人生を切り拓く原動力になったのではないかと思います。おそらく、若かりし日の佐々竹の活躍ぶりや、社会人としての功績を耳にした同窓生の間で、自然発生的に主将であったという伝説が生まれたのかもしれない。

慶応戦での明治の勝利を報じる東京朝日新聞（S7.11）



大学教授による課題研究ワークショップが行われました

12月2日、「大学進学のための学力向上推進事業」の一環として、1年理科の生徒を対象に大学教授による課題研究ワークショップが行われました。当日は福島県立医科大学教授の大平哲也先生をお招きし、「感染症の歴史とその対策」の演題で講演をいただきました。生徒諸君は、人類がどのようにして感染症と闘ってきたのかを学ぶとともに、新型コロナウイルス感染予防策、コロナ禍における心身の健康問題について理解を深めました。データを駆使したエビデンスに基づく説得力のある説明、軽妙でユーモア溢れる語り口により、あっという間に時間が過ぎました。大平先生のご専門である疫学・予防医学からのアプローチは、感染症を考える上で示唆に富み、大変参考になりました。また12月6日には、上記事業の一環として、2年進学希望者を対象に特別講習会を開催しました。河合塾の朝枝伸太郎先生、岩崎雄一先生による講義を通じて、英語と数学の実力アップを図りました。



【課題研究ワークショップ生徒感想(抜粋)】

- 疫学という難しい学問を様々な側面から楽しく教えていただき、笑いも含めてたくさんの事を学ぶことができました。(K.T)
- 様々なデータを用いて根拠を見いだして、これからの医療のために研究されている先生のような方や、コロナウイルスに対し働いてくださっている医療関係者の方々に感謝して日々の生活を送るべきだと実感した。(T.K)
- 世界的にコロナウイルスが問題になっている今、感染症について詳しく知ることができてよかった。医療に興味があったので、今回の感染症の歴史や予防方法を知り、これまで以上に関心を持った。(T.A)
- 今年の4月頃に比べるとコロナウイルスに対する危機感が薄れてきているので、油断せずこれから対策をしっかりしていこうと思いました。(W.J)
- 未知の病気が怖いので、どの情報が正しいのかを適切に判断し、予防することが大切だとわかった。(E.K)



出版局が全国総文祭和歌山大会へ

12月17日、第25回全国高校新聞年間紙面審査賞第1次審査の結果が発表されました。本校出版局が入賞校46校の中に入り、令和3年8月開催の全国高等学校総合文化祭和歌山大会新聞部門への参加が決定しました。本県からは福島高校、郡山北工業高校が選ばれています。入賞した学校はどの高校も新聞作成に力を入れており、そうした学校から大いに刺激を受け、自分たちの今後の活動や紙面作成に生かして欲しいと思います。日頃の活動の成果が認められ、本当におめでとうございます。



イノベーション・コースト構想事業シンポジウムに生徒が参加しました

12月19日、双葉町産業交流センターで行われた上記シンポジウムに、本校から荒竜馬君と田中愛梨さんが参加しました。二人はイノベーション・コースト構想に係る本校の取り組みについて報告しました。荒君は2年生の取り組みとして、10月に実施した研究施設・地元企業見学について発表し、また、田中さんは1年生の取り組みとして、今年度実施したキックオフセミナー、エネルギー講演会、大学教授による出前授業について発表しました。現在、これまでの成果のまとめとして、2年生が地域活性化プロジェクトに、1年生がSDGs(持続可能な開発目標)に関する調べ学習に取り組んでおり、3学期には発表会を計画しています。二人には今回の経験を活かし、リーダーとして活躍してくれることを期待しています。なお、発表前に来賓の加藤官房長官と内堀県知事から励ましの言葉をいただくという嬉しいハプニングもありました。



教育フォーラム高校生ワークショップ

12月25日、本県主催の令和2年度教育フォーラム高校生ワークショップがオンラインで行われ、生徒会長の田中暖々さんが、本校を代表として参加しました。「福島県の未来の学びはどうあるべきか」をテーマに、参加者がそれぞれの提案を発表し、その後意見交換が行われました。田中さんは、演劇等の舞台芸術が子供の情操教育に有用であり、福島県は公演を開催しやすい環境を整備すべきとの提案を行いました。

相高ART展が閉幕しました

12月17日から24日まで行われた相高ART展が好評のうちに閉幕しました。会場となった相馬ギャラリー(相馬駅前振興ビル)には、相高生や教職員だけではなく、保護者、同窓生、相馬市民の皆様にも多数ご来場いただきました。来場された皆様からは、生徒達の作品や活動に対して、たくさんの励ましの言葉をいただきました。紙面を借りてお礼申し上げます。

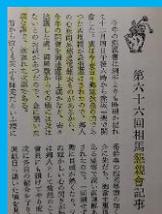
後片付けに精を出す生徒達



同窓生列伝⑳折笠晴秀(1885-1965) 続編 ～在京浜相馬出身者との親睦を深めた折笠～

京浜地区に住む相馬中学卒業生の固い結束については、以前にも述べましたが、折笠は同窓生でつくる京浜馬城会の会合はもちろんのこと、同窓生を含む相馬出身者との交流も大切に、さまざまな会合に出席して親睦を深めました。馬城会以外の会合について、折笠の出席が確認できたものを、年代は限定的ですが、以下のとおりまとめてみました。

- ①昭和6年1月10日 相馬広胤様御渡英送別会
- ②昭和6年5月5日 黒木正巳君招待会
- ③昭和6年11月24日 第62回在京浜相馬人懇親会
- ④昭和11年4月11日 故相馬孟胤子爵追悼会
- ⑤昭和11年12月4日 第66回在京浜相馬人懇親会
- ⑥昭和11年 相馬郷友会を語る座談会
- ⑦昭和12年2月23日 故相馬孟胤子爵一周忌追悼会(相馬郷友会発行「相馬郷」より)



- ①は旧相馬中村藩主の子爵孟胤氏の弟である広胤氏が、官名によりイギリス、ドイツ、フランスに留学した際の送別会です。出発3日前に相馬出身者が芝浦の雅叙園に集い、送別の宴を催しました。
- ②は早稲田大学野球部主将となった黒木正巳氏(相中23回卒)を

激励するため、新宿安田本店で開催されました。開会の辞のあと、黒木氏が挨拶に立ち、参集した同郷人に感謝の言葉を述べています。激励会は出席者のスポーツ観や野球談義に華が咲き、寛いだものになりました。黒木氏については『校長通信』第3号で紹介しましたが、折笠が黒木氏と顔を合わせていたことは興味深いと言えるでしょう。折笠が福浦村、黒木が金房村出身ですので、隣村同士、故郷の話に花が咲いたかもしれません。また、野球部で後輩だった明治大学ラグビー部の佐々竹直義も出席しており、久しぶりに中学時代の話で盛り上がったのではないかと思います。③と⑤は京浜地区で活躍する相馬出身者の有志により毎年開かれていました。記録が乏しく詳らかではありませんが、折笠は懇親会の中心的な存在だったようです。昭和6年に赤坂山王下の幸楽で行われた懇親会では、折笠が自己紹介のトリを務めています。④は同年2月に亡くなった相馬孟胤氏の七十七日忌として芝公園水交社で行われました。病気で葬儀に参列できなかった折笠は、追悼会には出席しています。また、翌年には⑦のよう一周忌追悼会が本郷駒込吉祥寺で行われ、折笠は参会者を代表として挨拶を述べています。故孟胤氏の遺徳を慕う折笠の言葉は、参会者の涙を誘い一同に深い感銘を与えました。